

# さんりんしゃ

## 子どもの社会性

朝から絶好調！かけっこ遊びに興じる子どもたち



今、10月の運動会へ向けて、遊びを取り入れながら楽しく取り組んでいます。中でも、「集団行動」は避けて通れません。それができないと社会性が育まれていない子とわかってしまうかも。そう思うと親としては悩んでしまいますよね。

確かに生きていくためには、集団行動が必要になる場面もたくさんあります。社会性を身につける上で大切なことでもあります。それを身につけるようにするのが、幼稚園とか学校なんじゃないかと思います。これまで家庭という小さな社会で育ってきた子どもたちがいきなり集団の中に入るのですから、すぐにできる

ことを期待されても、子どもも大変かも。あまり心配しなくてもいい理由は、年齢的なこともあります。個人差はありますが、一般的には社会性が芽生えるのは3、4歳からと言われています。

繰り返し「なぜその集団行動が必要なのか」を根気強く説明していくことで、子どもの社会性を園と一緒に育んでいけばいいんじゃないかと思います。運動会もそんな体験の一つかもしれません。たとえば、絵本の読み聞かせの時間に「ママ、おもちゃのほうがいい」と子どもが言ったら、「おもちゃで遊ぶのも楽しいよね。でも今は先生が素敵なお話を〇〇ちゃんにプレゼントしてくれる時間だから、ちょっとだけ聞いてみようね」と「いいことあるよ」的に説明してみるのも一つかも。

なぜその行動が必要なのかを繰り返し説明して、見守ってあげてください。

食事は体の栄養もあるけど、そこで楽しい時間を過ごすという「心の栄養補給」の意味も

園給食だけでなく、家庭での朝・夕の食事の時間も「食べた」「食べない」よりも「楽しい」を優先させるのも大事かもしれません。また、ダラダラしないように時間を決めてしまうことも必要かもしれません。たとえば、あの時計の針が6のところにくるまでは食べてみようね」と伝え、針が6のところきたねもうおしまいにする？と聞いて、「いらない」と言ったら片付ける。



# あなたは何者ですか

と聞かれたら、まず「この子の母親です」と答えるのが第1です。みなさんは「アイデンティティ」という言葉を聞いたことがありますか。自分が何者であるかという認識のことです。

なぜ、こんなことを書くかというと、「育児は親自身の育自」だと考えるからです。自分を育てるというのは、2歳児のときは2歳時の母、年少のときは年少の母、年中になったら年中組の母、年長組になったら自分は年長組の母として子どもと接するときはどうしたらいいのかという勉強をしなければなりません。どういうことかと、過保護と過干渉で考えると分かりやすいと思います。いい方を変えれば、子どもの望んでいることを聞きすぎるのが「過保護」。子どもが望んでもいないことをやらせ過ぎるのが「過干渉」こういうと違いが分かりやすいと思います。つまり、子育てをしながら手をかけ過ぎてはいけないところは、手出しをしないことです。かけることはしっかりと関わる。それが分かっているのです。だから、そういう意味で子どもの環境をしっかり見つけ、しっかりと理解し、子どもに接するのは、環境の変化に応じて、子どもがすべきことが私たちがちゃんと選んで対応しなければいけないということを優先して行うことが必要です。お母さんは「育児は育自」という認識をもつことが大切です。

以前にも書きましたが、「手をかける」とは、「心をかける」ことです。

「何不自由なく子どもを育てた」とよくいいますが、お金をかけたという意味で使われることが多いのです。おなかをすかせたことはないとか、着るものに不自由はないとか、ゲームは買って与えたとか、いろい

ろなところに連れていったとか、ともかくお金を使って不自由なく育てたと親は思っています。でも、それはすべてが子どもの希望にしたがって行った行為ではありません。このところを勘違いしている親が多いのです。

抱っこし過ぎたら、子どもはずっと抱っこを求める子になり、しっかり歩かない子になるんじゃないか、などと心配するお母さんがいますが、そんなことはまったくありません。だっこしてあげるほうがしっかり歩きます。幼稚園から帰ってきた子がお母さんに、「抱っこして」と甘えることがあると思いますが、子どもはその日にあったつらいことを、抱っこされることで帳消しにしたいと思っているからです。だから、「抱っこ」というのですね。

そんなときは、喜んで子どもを抱きしめてあげればいいのです。そうすれば、つらいことなどけろっと忘れて、明日に向けて出発できるのです。

子どものために時間を割いてあげることです。そうすることで、子どもは守られている、愛されているという安心感からだんだん安定することができるはずです。

